

# 駒沢大学創立百周年記念号発刊に際して

外国語部長 栗原万修

今年度、駒沢大学は創立百周年を迎えた。そしてちょうどこの同じ年に、私たちの外国語部も創設十周年を迎えたわけである。大学100年のうち10年間は学内における外国語部の歴史ということになる。

学校教育令により創立された駒沢大学は、最初大学名を「曹洞宗大学林」と称し、明治15年10月15日、麻布に新築校舎を落成、開校した。そしてその日が駒沢大学の創立記念日となるわけだが、本年度はさらにその百周年の記念すべき年となったという次第である。その後、明治38年に校名を「私立曹洞宗大学」と改称、さらに大正2年、当時の駒沢村に移転して、現在の駒沢大学の礎をきずいたが、大学令によって現在の「駒沢大学」と改称されたのは大正14年のことである。

当然、当初は宗門関係者による主として僧侶養成のためのごく小さな大学にすぎなかった。それが今日のように、仏教学部と文学部だけではなく、経済学部、法学部、経営学部、そして短期大学、北海道教養部、さらに二部3学部等、2万人余の学生を擁する総合大学へ発展してきたのは、実のところそれほど昔のことではない。そして、すでに「外国語部10周年記念号（論集第15号）」でくわしくその経緯が述べられているように、外国語部が文学部より分離・独立したのが10年前になるわけである。

駒沢大学は、戦後の高度経済成長の波にのって急速に大きくなってきただけに、その内部的な矛盾や不整備といったものがまだ現在も残されていることは事実である。しかし、10数年以前の学園紛争および8年ほど前の教職員組合の結成を機に、学内のさまざまな制度や組織の改革が行なわれ、その改革の成果があらわれはじめるにつれて社会的評価が次第に高まってきたこともまた事実であろう。

さらに今回の大学創立百周年を記念し、旧1, 2号館および本部棟、講堂を解体、少なからぬ金を投入して近代的な新しい校舎や本部棟、記念講堂等が、また玉川グラウンドには新しい体育館が建てられ、設備面における充実も大きく一步すすんだとあってよいだろう。外国語部に関したことでいえば、新校舎内の最新設備をほこるLL教室の充実は今後大いにその力を発揮してくれることと思う。

しかし駒沢大学の、そして外国語部の真価が問われるのは、むしろこれからであると思う。大学進学率の減少、大学間の競合など、おそらくこれから先の大学は、目先のことだけにとらわれず、10年先、20年先を見つめながら運営していかなければ、よい大学として生きのこることはできないと思う。

わが駒大の現状からいえば、まず法人機構の整備、首脳人事の公選等、責任の所在を明確化し、大学全教職員の総意が反映しうる運営体制を一刻も早くつくり上げることが、最も重要な課題であるだろう。さらに環境の整備、古くなった校舎や設備の改修、カリキュラムや教員スタッフの充実、また北海道教養部、附属高校、二部のあり方等、まだまだ問題はたくさんある。それらのことを一つ、ひとつ解決しながら、これから先、駒沢大学がさらによりよい大学として広く社会に貢献できることを心から祈りたい。

幸い、建物だけではなく、創立百周年を記念した奨学金制度や、学生諸君への短期貸付金制度、医療費補助制度なども発足し、いっそう勉学しやすい環境づくりが進みつつあることは、よろこばしいことである。私たち外国語部も、教授会を通して大学の一組織として、あるいはまた個別的なレベルであれ、今後ともに駒沢大学発展のため尽力していくことをおしまないであろう。

(1983年1月記)